に応じてチェックの機能を果たし得たであろうし，また，根拠として利用された。パーニニ学派の文法には近現代に至るまで多数の注解が著されたが，基準的役割を果たしているのが現存最古の注解である『カーシカーヴリッティ』（後7世紀）である。仏教徒やジャイナ教徒は独自の文法の伝統を作ったが，パーニニ学派の文法の改作に過ぎない。

パーニニの文法は動詞語根表を前提としている。これは現在語幹形成法を10種に分類し，その何れかに全動詞語根を配備したものである。動詞語根の中には現在語幹を作らないものもあるが，それらも何れかの類に分類されている。この分類が，今日の文法書においても現在語幹の分類法として一般に採用されている。語根表には後に語義も付加された。また，注釈書（後12世紀以降）も複数著され，活用・派生形を知る為に用いられた。パーニニ文法の術語から出発して，今日広く用いられるようになった概念もある。サンディ（隣り合う音素同士の間に起こる音韻変化，原義は「結合」），バフヴリーヒ（所有複合語，原義は「多くの米をもった」），ヴリッディ（原義は「増大」，パーニニ文法では長母音＋共鳴音からなる母音：アーイ，アーウ，アールを指した。現在の歴史文法では，語頭に近い位置に母音を挿入し，接尾辞を付して「帰属，派生」などを表す名詞〔形容詞〕を作る派生法の意味に転用されている。例えば，deva-「神」はラテン語の deus 等と同起源で daiva-に由来し，古インドアーリヤ語の dyau-/div-「天」に当たる語から作られたヴリッディ派生形である：< d-a-iv-a-），などは代表例である。

パーニニ文法の底本は今もって Böhtlingk, Pāṇini's Grammatik（Leipzig 1887）である。概説として，辻直四郎「インド文法学概観」『ヴェーダ学論集』424－477，熊本裕「インドの言語学」『言語学大事典』第6巻・術語編（1996）83－100（音声学，語源学をも含む）が勧められる。また，後藤敏文「インド伝統文法学をめぐって」『特定研究「近代諸科学から見たインド思想の批判的分析」報告書』（岩手大学人文社会科学部1990）65－85も参考になろう。最近の研究書の中では Cardona の一連の著作は重要である。History of Language Sciences I (Ed. Auroux, Koerner 他，Berlin－New York, 2000) には Bronkhorst, Cardona 等の最新の概説が収録されている。

2.2. 音韻書：プラーティシャーキャとシクシャー

「プラーティシャーキャ」は「各学派毎の書」の意味で，音韻規則を統一したものである。ヴェーダのテキストの，単語に分割した読み（→ 1.）から元の続け読みを復元する手続きを中心とする。インドでは伝統的にパーニニ以前のものとされているが，今日では，ティーメ（Thieme）の見解に基づき，パーニニ以後と見なされることが多い。しかし，決定的な論拠はない。ヴェーダ補助学の一つに数えられるシクシャーは，元々「学習」の意味で，ヴェーダのテキストの正しい発音法を教えることを目指している。ヴェーダ学派に帰属するが，学派名というよりは個人的権威の名を冠して伝えられ，伝承されているヴェーダテキストを前提とする後代のものである。紀元前に遡る要素は無いと見て差し支え無い。W.S. Allen の Phonetics in Ancient India（London 1953）は便利な解説であり，R. Stautzebach, Pāriśikṣā und Sarvasaṃmataśikṣā（Stuttgart 1994）がこの方面の原典研究の最新のものである。

2.3. ヤースカの語源学

ニガントゥ Nighaṇṭhu（「綴り合わせ」？）と称される，元来リグヴェーダなどに現れる難解語彙を集め分類したものがある。ヤースカ（Yāska）に帰せられる語源学（ニルクタ Nirukta）の中心部分は，これに対する注釈の体裁を採って語源を述べ，典拠としてヴェーダの讃歌を引用して解釈を挙げる。ヤースカの年代は伝統的にパーニニ以前とされてきたが，Thieme 以来パーニニが先行するという説が有力である。パタンジャリはヤースカを知っていた。ヤースカは序論部分で文法学派とはやや異なる言語論を説く。引用文の解釈には，むしろ祭式解釈の伝統を思わせるものがある。注釈には複数あり，原典にも増広を伴った複数の版がある。刊本と訳は Roth（1852），Sarup（1926以降数版）が標準的。最近のものでは，M. Deeg, Die altindische Etymologie nach dem Verständnis Yāskas und Seiner Vorgänger（1995）にブラーフマナの神学的語源説，ニルクタの解釈等が語彙順に集められいる。

2.4. 索引類（アヌクラマニー）と補遺文献

ブラーフマナには，引用される讃歌の作者が挙げられ，因縁譚が語られることがあるが，ヴェーダ文献には後に各種の索引類が作られた。現存するものはシュラウタスートラ等が作成される時代以後のものであり，シャウナカ，カーティヤーヤナ等の権威に帰せられる。リグヴェーダの各讃歌・詩節の作者（リシ，→ 1.1.），韻律，捧げられる神格名を列挙したものが，この種の文献群の中核の役割を為したと考えられる。これらは，更に，各種の注解・論究によって敷衍され，様々な文献を生み出した。伝説を中心とした Bṛhaddevatā (-Anukramaṇī)『増広神格索引』(MacDonell, Tokunaga

によるEd.あり），処世訓にリグヴェーダ詩節を用いるNītimañjarī『処世の花房』，呪術的なṚgvidhāna『讃歌の処方』などがそれである。紀元後の長い時代を懸けて成立し，あるいは増広を受けていることから，学問上の生きた伝統であり続けたことが窺われる。これらの伝統は前述のニルクタ系統の学問と密接に関連して営まれたものと思われる。リグヴェーダ詩節の詩行を分割する際の難点を取り扱った小論もある(Pādavidhāna)。サーマヴェーダ系の索引群は歌詠に関する技術的な論書を始め，「ブラーフマナ」，「スートラ」の名を冠する多くの付属文献を生み出した。中には言語学的に興味あるものも存する。ヤジュルヴェーダの場合には，マントラに関するリシ，韻律，神格索引の他，章毎に該当する祭式の場面を呈示する索引もある。タイッティリーヤ派の祭式索引は現行テキストと一部異なる編集を示す傍系学派のものであり，無視できない情報を与える。白ヤジュルヴェーダ（ヴァージャサネーイン）派(→ 1.2.）は，独自の音韻書，各種祭事の綱要書，ヴェーダ学派総覧等を始め，多くの付属文献を『補遺』として編集した。C.G. Kashikar の A Survey of the Śuklayajurveda Pariśiṣṭas (1994) に詳しい案内がある。アタルヴァヴェーダの補遺を名乗る文献は占術・予言等を中身とし，さらに付属文献をもつ。

2.5. 韻律学

韻律（チャンダス）に関する言及，祭式において果たす役割・意義付けの吟味・検討は，初期のヴェーダ散文に多く見られる（→ 1.3.）。この傾向は既にリグヴェーダ自身に遡る。詩行を意味するパーダ（pāda）はもともと「足」を意味するpā́d-の新しい語形であるが，この用法はリグヴェーダにあり，ギリシャの韻律のpousに当たる。四脚動物の足から1／4の意味を経てできた用法であることは確実であるが，偶然の一致とは思われず，韻律に対する観念が一部印欧祖語段階に遡ることを示唆する。

リグヴェーダ索引（Ṛganukramaṇī, → 2.4.）は讃歌の韻律を同定し，プラーティシャーキャ（→ 2.2.）は音韻学の一環として韻律の基本単位である音節の「軽重」と時間的単位（mātrā「モーラ」）とを定義している。Ṛkprātiśākhyaの巻末とNidānasūtra（サーマヴェーダ所属の付属文献）の冒頭（I 1－7：chandoviciti「韻律の分類」）は韻律の解説に当てられている。独立した「韻律学」として確立したものはピンガラ（Piṅgala）に帰せられる『チャンダッハスートラ』(Chandaḥsūtra）であり，ヴェーダの韻律と世俗（即ち古典サンスクリット文学）の韻律とを取り扱っている。ここで，韻律の実態に触れておく必要があろう。

ヴェーダ期の韻律は，1詩節中の詩行数（4を標準として，3，5など）と，1詩行中の音節数（8，11，12，5，10など）によって定義される。音節には短（インドの伝統は「軽」と呼ぶ：短母音による開音節，1マートラー）と長（同じく「重」：それ以外の場合，2マートラー）との区別があり，詩行の終結部（カデンス）においては，原則としてそれぞれの韻律に固有な，決まった配列を示す。カデンス以外の部分については，一定の傾向が看取されるものの，原則的に自由である。カデンスにおける長短の音節の配列は，上述の如くNidānasūtra, Ṛkprātiśākhya等には言及されるが，チャンダッハスートラは音節数のみを規定し，長短の配列に言及しない。

これに対して，古典サンスクリット文学の韻律は，ヴェーダの韻律を母胎としながら，民間音楽の影響をも受け，大きな変質を遂げた。古典韻律は（1）音節数と長短が原則として厳密に規定されているアクシャラチャンダス（akṣarachandas「音節韻律」），（2）音節ではなくmātrā数により規定されるマートラーチャンダス（mātrāchandas），（3）4 mātrāを1 gaṇa「群」とする単位によって規定されるガナチャンダス（gaṇacchandas）に大別される。圧倒的多数を占めるアクシャラチャンダスの中核はヴェーダ韻律の緩い規則がもたらした多様な変化形のそれぞれが独立の韻律として固定され，更には複雑に組み合わされて成立したものと考えられる。インド数学の順列組み合わせには，この長・短音節の並び方の可能性が材料として用いられている。（2）と（3）とはおそらく民間音楽を起源としつつ古典韻律の中に組み込まれたもので，古典期に懸けて，やはり固定化されてゆく傾向にある。ヴェーダ韻律と古典韻律との中間に位置するのが，ヴェーダ散文文献に散見する所謂ガーター（gāthā）詩節，ウパニシャッド，叙事詩，仏典（パーリ，仏教梵語），ジャイナ教典（アルダマーガディー語）に見られる韻律形態で，自由な音節配列が特定の形態に分化・固定されてゆく過渡期的状況を示している。この段階の実態の細部は未だ十分に解明されていない。

A. Weber, Indische Studien 8 (1863) は『チャンダッハスートラ』のテキスト，翻訳，詳細な解説・研究を含み，更にヴェーダ文献における韻律への言及や韻律一般を論じており，韻律および韻律書の研究における出発点である。ピンガラとその『チャンダッハスートラ』の年代は不明であるが，古典韻律が成立する最初期の姿を示す。Nāṭyaśāstraや Agnipurāṇa の韻律に関する章，Vṛttaratnākara, Chandonuśāsanaなど，韻

律書，韻律の手引きの類は，その後多く作られ，韻律の人工的固定化の進行過程をある程度反映している。伝統的韻律書は現代的研究においても手がかりとなることがある。ただし，パーリやプラークリット（中期インドアーリヤ語）の韻律書は古典サンスクリット美文学の規範に倣ったもので，現実のテキスト理解の出発点とはなり難い。韻律書では，韻律の定義がその当の韻律を用いて表されることも多い。H.D. Velankar 編集の Jayadāman の付録（1949）は，伝統的韻律書の記述箇所を各韻律名ごとに挙げ，総索引として便利である。さらに，「インド学の将来」（1）インド学の 4.2. を参照されたい。

3．解釈学とその伝統

上記のように，ヴェーダ文献を巡る営みの中から，各種の学問領域が成立してきた。ヴェーダ文献を職業的手段としていた祭官学者階級に主導されて諸学が成立したのであるから当然と言えよう。伝統学問領域の中には現代的文献研究においても方法として，また，情報源として，活かされているものがある。このことは，言葉のハードウェア部分を扱う営為，文法学，音韻論，韻律学に特に当てはまる。

これに対し，伝統的解釈学は歴史的な価値に留まるものと判断される。ブラーフマナの神学的解釈は宗教史的，民俗誌的に貴重な資料の宝庫であり，研究対象として多様な観点から重要であるが，その解釈の中身そのものが普遍的価値を持つものとは言い難い。語源学も同様である。ヴェーダ文献成立時に大きく遅れて学派を形成したミーマーンサー学派の体系も，ヴェーダ祭式の統一的解釈理論を標榜するものの，「解釈」をシステム思考の対象・材料とした営みにすぎず，それによってヴェーダがよりよく理解できるようになるという積極的な価値を持つものではない。インド古代・中世の学問は，一度学派が形成されると，その内部での訓詁，注解，或いは，外部からの批判に対する防衛に終始した。パーニニ学派の文法学も，言語そのもののよりよき理解を目指すことなく，文法を材料とした注釈学に留まった。現代的な文献学は19世紀のヨーロッパ，特にドイツ語圏で成立した営為を経たものであり，伝統的解釈は，当然，当時の「哲学的解釈」に留まる。ただし，サンスクリット文法の確立，引いてはインドヨーロッパ語比較言語学の成立にパーニニ文法が果たした役割，音韻学・韻律学のある種の普遍的水準，14世紀の注釈家サーヤナ（Sāyaṇa）がリグヴェーダを始めとするヴェーダ文献の理解を導いたこと，ドイセン（Deussen）を始めとするウパニシャッドの翻訳家がシャンカラ（Śaṅkara，8世紀前半）の解釈から出発したこと，などを考えると，インドの伝統学問が達成していたものは誇るべき遺産といえる。

4．文学作品と注釈学

紀元後に始まる文学作品においては，文法学，韻律学，修辞学，伝統辞書，その他確立した学芸諸領域に対する理解と知識に根拠を置くことが求められた。この傾向は後代になるほど著しい。詩作理論は7世紀頃の Bhāmaha，Daṇḍin を始めとする学者の手でアランカーラ（修辞学）に纏められ，規範となった。文献史概説に E. Gerow, Indian Poetics（1977）があり，上村勝彦の一連の研究・翻訳がある。伝統辞書は kośa（または koṣa「桶，容器」）とよばれ，同義語が詩作用に並べられたものである。最も普及しているのは韻文で書かれた Amarakośa（古くて6世紀）である。C. Vogel, Indian Lexicography（1979）に概説がある。詩，戯曲等の文学作品はこれらに依拠すべきものとされたが，注釈家は，さらに，造詣の深さを発揮すべく努めた。著名な注釈家に，カーリダーサの諸作品に注を残した Mallinātha（15世紀），それに先行する Vallabhadeva などがある。詳しくは辻直四郎『サンスクリット文学史』（1973），S. Lienhard, A History of Classical Poetry（1984）等を参照されたい。

5．諸学芸分野と経典類の成立

インド学芸の一特色は，スートラ（sūtra）等の名の下に教義内容を纏めて権威ある書とし，学派を形成した点にある。この種のテキストはごく短い文からなることが多く，時には単なる主内容を列挙した目次の様相を呈する。具体的教説は bhāṣya「説かれるべきもの」，vārttika「実際の運用に資すべきもの」，vṛtti「運用」，ṭīkā「逐一解釈」などのジャンル名をもった注解・注釈文献によって担われる。哲学学派はサーンキャ学派を除き，紀元後4～5世紀までの間に「スートラ」をもつに至った。医学学派は Caraka，Suśruta，Bhellā，Aṣṭāṅgahṛdaya などの「サンヒター」（saṁhitā）と称する教典を纏めた。ヴェーダ学派に属する「法典」（ダルマスートラ）から展開し，より普遍的役割を担うに至った，Manu, Yājñavalkya, Viṣṇu, Vaśiṣṭha 等の

法典類は「シャーストラ」(śāstra) または「スムリティ」(smṛti) と称される。カウタリャ (Kauṭalya) の『実利論』(Kauṭilīya-Arthaśāstra) も「シャーストラ」(教本，教科書) である。王族階級を念頭に置いたものとしては，その他，兵法，馬術，象術，弓術等に関する「シャーストラ」が纏められた。インドでは各学派に亘って，項目 (「法数」) を数え上げて纏める傾向が強かったが，人生の目標は，一般に，法 (dharma)，実利 (artha)，愛欲 (kāma) の3箇条とされた。前2者については既に触れたが，カーマについては「カーマスートラ」(またはカーマシャーストラ) が纏められた。音楽，建築，絵画，彫刻，農耕，飼育，調理，遊技等についてもスートラ，シャーストラが作られたが，時代は下がる。

天文学はヴェーダ祭式の執行に必須の知識であった筈であり，星宿への言及も多い。しかし，ヴェーダ文献に見られる暦は確定されないまま今日に至っている。後のデータに基づく不合理な説明が与えられていることもある。ヴェーダ文献そのものの所見に基づくカレンダーの再建は見込みのある緊急課題であり，初期仏典の内容理解にも欠かせない。ヴェーダ補助学の一つとして，リグヴェーダ所属とヤジュルヴェーダ所属とされる『ジョーティシャ』(Jyotiṣa 天文学) が現存するが，ヴェーダ文献に見られる暦法の中身とは合致しない。紀元前の文献ではあるが，そこで用いられる tithi-「日」の語はグリヒャスートラ以前には遡れず，内容的にはバビロニアで古くから用いられていた概念に一致するという。19世紀中頃にヴェーダの暦法研究に貢献したのはヴェーバー (A.Weber) であった。しかし，その後，インド天文学史研究は西方から移植された天文学の文献研究に終始している。西方起源の纏まった文献で現存最古のものは，紀元後2世紀中頃にサンスクリット語に訳されたものに基づくとされる Yavanajātaka『ギリシャ人たちのホロスコープ (誕生時星図占い)』である。占星術始め，各種の占い，予言の書も多く著された。

医学書に関しては G.J. Meulenbeld, A History of Indian Medical Literature (1995－)，矢野道雄『インド医学概論』(1988) が，法典類では，マヌとヤージュニャヴァルキャの両法典の翻訳と解説が渡瀬信之，乃至，同氏と井狩弥介によって出版されている。『実利論』には上村勝彦訳，『カーマスートラ』には岩本裕訳がある。天文学・数学関係については，矢野道雄『インド天文学・数学集』(1980)，D. Pingree, Jyotiḥśāstra (1981) 他，両氏と林隆夫他の業績を参照されたい。ヴァラーハミヒラ (Varāhamihira, 6世紀) の『占術大集成』が矢野道雄・杉田瑞枝によって翻訳紹介されている (1995)。

6．文献伝承の性格とテキスト批判

学派が形成されると，根本的立場は改変を被ることなく，問題の精緻化へと向かった。文字が使用されず，あるテキストを先ず暗記してから自説を付加するスタイルがとられたこと，知識が一部の階級の独占であったこと，口頭の論争が主であったこと，権威・流派の存在などに理由・条件が求められよう。ある教説が権威あるものとして纏められると，先行する見解は，その中に吸収されるか，破棄されたものと思われる。ある程度は後の見解も竄入・混入され得たであろう。異見，研究史への言及は，直接反駁の対象として引かれる哲学書の場合を除き，それほど多くない。ウパニシャッドや仏典に，王と学者 (ないしブッダ) との対話として研究史が戯曲化されて収められているが，貴重な資料である。叙事詩マハーバーラタ中には，哲学説，法典や実利論，人生の重要項目に関わる言説などが見られるが，それらの中には，学派が基本教典を整備して確立した時点で捨て去られたり，収録箇所を見出せなかった見解等が集められ，或いは，残されている可能性がある。各文献毎に，単一のテキストが権威あるものとして伝承されている。有力な注解者 (文法学におけるパタンジャリ，ヨーガ学派における同名のパタンジャリ，ニャーヤ学派におけるヴァーツヤーヤナ，主要ウパニシャッドに対するシャンカラのような) が現れ体系を決定づけると，その際用いられた原典と当の注解とが選び残され，単一な伝承のみが後に残される傾向がある。従って，写本は単に誤りや誤解，二次的改作の程度の差を示すだけであることが多い。そうでなければ，異なる流派に属す別の文献になってしまっている訳である。他方，ヴェーダの編集時代以降は，正書法や文法に対して「改良」が組織的に加えられた形跡は殆ど無い。例えば，ビルマの学僧が結集の度に，どの程度パーリ仏典に手を加えたか本報告者には判断できないが，組織的な原典批判の試みとしては例外的な部類に属すると推測される。また，伝承はあくまで連続した単一の流派によってのみ担われ，別の流れの中に移植され，評価・受容に与る，という契機を経ていない。この意味でも，聖書学，西洋古典学とは異なる文献成立と伝承の事情がある。

観派内部にブッダパーリタやチャンドラキールティのような「帰謬論証派」とバーヴィヴェーカが代表する「自立論証派」の対立があったことが明らかになった。また，『プラサンナパダー』『般若燈論』などの『中論頌』注釈書だけでなく，『入中論』や『タルカジュヴァーラ』などの独立の論書の研究も盛んになった。さらに，ジュニャーナガルバやシャーンタラクシタ，カマラシーラなど，それまで余り研究されることがなかった中観論師についても，一郷正道の『中観荘厳論の研究』など本格的な研究が刊行された。近年の問題提起として，龍樹の著作の真作問題がある。松本史郎，トーラとドラゴネッティ，ピントらは，『廻諍論』や『広破論』の真作性に疑問を呈している。

唯識派に関しても，その主要文献である『瑜伽論』『大乗荘厳経論』『摂大乗論』などの研究が着実に進展している。注目された問題提起としては，フラウワルナーが漢訳でのみ残されている世親の伝記にもとづいて公表した「世親2人説」がある。『倶舎論』の作者と弥勒・無着の論書に対して注釈した世親を区別しようという提案に対しては，賛否交々であったが，世親に帰せられる様々な論書を分析して，有部から経量部，さらに唯識派へと『倶舎論』の作者である世親が思想的遍歴を遂げたという考えは広く受け入れられるようになった。戦後における唯識思想史研究の最大の成果として，Lambert Schmithausen の『*Ālaya-vijñāna*』(1987) を挙げねばならない。なお，高崎直道，Ruegg らによって『宝性論』などの如来蔵思想の研究が刊行されたこともここに付記しておく。

戦後の仏教思想研究において，戦前と較べてもっとも顕著な成果を挙げたのは，ディグナーガやダルマキールティに代表される佛教認識論・論理学の研究であろう。その原因は，ひとえにラーフラ・コレクションなどに含まれていたダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールティカ』に対する注釈類，あるいはジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティなどこれまでほとんど知られることのなかった後期仏教論理学者のテキストの梵語原典が刊行されたからであろう。その中心となったのは，フラウワルナーによって先導され，シュタインケルナーによって確立されたウィーン大学の伝統である。ダルマキールティとその後継者たちの主要著作の校訂・翻訳が次々と公刊されている。日本では，北川秀則・服部正明のディグナーガ研究，戸崎宏正のダルマキールティ研究，梶山雄一の後期仏教論理学研究が世界的なレベルの成果を挙げた。

6.5. 密教

密教経典の文献学的研究を先導したのは松永有慶など日本の研究者であったが，チベット仏教，特にチベット密教の経典や論書，マンダラや儀軌などが知られるようになると，フィールドワークによる，チベットの密教の伝統と日本のそれとの本格的な比較研究が盛んに行われるようになった。また，密教の源流をヴェーダの祭式や真言，さらにそれ以前のインド土着の民間信仰にまで遡って考えようという提案がなされてきた。一方，シヴァ派の密教の代表的な研究者である Alexis Sanderson らによる最後期のインド密教とヒンドゥー密教との交流関係の文献学的検証は，密教の歴史とその性格を考える上で極めて重要な貢献である。インド密教史にルネッサンス思想史研究の方法論を適用した注目すべき最新の成果として，Ronald M. Davidson の *Indian Esoteric Buddhism* (Columbia Univ. Press, 2002) を挙げておく。今後の密教史，インド仏教思想史研究に大きな影響を与えるものとなるだろう。なお，密教研究が，『密教仏の研究』の著者であり，インドにおける仏教美術の調査を繰り返し行ってきた頼富本宏の場合のように，しばしば仏教美術の研究の進展を促してきたことも指摘しておきたい。

以上，戦後の仏教学研究について，極めて個人的な印象を述べてきたが，ほとんど触れることが出来なかった個々の研究業績については，Indo-Iranian Journal の創設者であり，編集者であった J.W. de Jong の *A Brief History of Buddhist Studies in Europe and America* (Varanasi 1976) (平川彰訳『仏教研究の歴史』1975) を参照されたい。この補足は，Eastern Buddhist (17－1，1984) に掲載されている。